



當世諸藩不獨自場
 卷一



特別
 13
 1633
 1



13
1633
1



序

大論よ日憍慢是顯志之本ナリと波時ハ
 五塵六欲の風隨縁志如の波の立在
 之をえハ我憍よ起りさるハ神を
 たれ之佛哉念しそ渴世乃旅とおとさんと
 思ふ先憍心ともある一是をふはるれ
 なる則神而仏たるをさるハ我を月影



713
1633
1-5

世とソもすぐに自^ぶと^んと^んも又
志^し海^{かい}ん^ん志^し子^し角^{かく}小^{せう}のが^の交^{かう}交^{かう}乃^の持^ちり
て^て何^{なに}ら^らひ^ひる^る志^し意^いを^を独^{ひとり}自^{ひとり}悟^ご全^{ぜん}約^{やく}不^ふ得^{とく}と
る^る一^{いち}一^{いち}つ^つら^らり^り自^{ひとり}悟^ご者^{しや}は^は出^い一^{いち}一^{いち}の^の事^{こと}
皆^{みな}さ^さぬ^ぬ志^しふ^ふく^く下^げさ^さり^りま^まの^の事^{こと}と^と尔^{なん}ソ^そも

了^りぬ^ぬ三^{さん}弁^{べん}の^の春^{はる}

作者^{しやうしや} 福^{ふく}陽^{やう}朝^{てう}

世^よ諸^{しよ}藝^ぎ獨^{ひとり}自^{ひとり}悟^ご卷^{まき}之^のを
風^{ふう}俗^{じやく}

目^め録^{ろく}

志^し節^{せつ}冠^{くわん}者^{しや}あ^ある^るた^たる^る内^{ない}院^{いん}
志^しぬ^ぬ相^{さう}云^{いん}形^{ぎやう}氣^き
志^し世^せん^ん石^{せき}の^の斗^{たい}略^{りやく}ハ^ハ志^しの^のに^に志^しる^る
孤^こ法^{ぽう}ら^らよ^よく^くつ^つ川^{せん}と^と小^{せう}野^の乃^の
名^な物^{ぶつ}と^と名^なを^をの^のげ^げと^と記^きは^はる^る

了^りぬ^ぬ三^{さん}弁^{べん}の^の春^{はる}

何せハねとぞもつねとあらめさかあまの
理とぞも母久と兼とけし家内いへのこび毎のねとよ
きれハ本とあつがや入我いれはとせまうと今とに
あこりハとぞもつねとけしハ内徳うちとくのまあらと
せハとぞもつねとけしハ内徳うちとくのまあらと
にねのありとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
一とぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
目のか一とけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
とありとつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
かつとぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
とぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく

十日とぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
毎のねとよきれハ本とあつがや入我いれはとせまうと今とに
あこりハとぞもつねとけしハ内徳うちとくのまあらと
せハとぞもつねとけしハ内徳うちとくのまあらと
にねのありとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
一とぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
目のか一とけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
とありとつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
かつとぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく
とぞもつねとけしハとぞもつねとけしハ内徳うちとく

あゝ世河ちつと目ざめりてさあはれはれとていふも
 かなしきまき右のよと目のくよあひして
 ちよさひおこひまやうあつりまかへる親を
 急らうとてふとつふまじ神うのいふとつ
 倅ちつともかろのさういふとつりませぬ
 掛巻とあつりまにうな果あつたれ親を
 とあつりまに親あつたれ思ひまじかあ
 いも長あつたれ思ひまじかあ思ひに
 かくいふまじと思ひたれちまじとこれ例
 なることさう出何とあつりまに今の中
 中だにさう思ひたれちまじと思ひたれ

もくやあつちつとあつちつとあつちつと
 ちよあつちつとあつちつとあつちつと
 と今あつちつとあつちつとあつちつと
 してあつちつとあつちつとあつちつと
 かあつちつとあつちつとあつちつと
 やあつちつとあつちつとあつちつと
 いてあつちつとあつちつとあつちつと
 ござりまにあつちつとあつちつと
 ちよあつちつとあつちつとあつちつと
 親あつちつとあつちつとあつちつと
 どのあつちつとあつちつとあつちつと

とそくやめて仕籠あんと此素との先程よふ似くといふを
目せしむるでいかにやぬかやうの附いふてかふ一腔うん
ごさうとすれまづ此素とのこころ志をいふまうくうら
りしをせとたがひは素とつまつけく一度はわかると此素は素たがひ
笑ひをかき逃足出さくうげうら母親のくまきとそくも
きそくア出せよそこな大だけいふあやうじやとては車にのつて
二枚書目ちかひは素とくうくあつて仕籠といふかくはがと
うらうら氣遠といふうらもや素よ素もあつちつとらぞんも
ゆきとふみのすんばぶあると思ふてつらで親の首ふるといけり
ものといかのまぶらうらとあつてあつて腹まむそくせ
此素とくうらひて親あつてとてかやすはうらじかひは素とくうらひ

で親とるかまの神武の年まきな見子の長を素素あつての
返着はくそも母人も素素あつて人と生れぬ素とく思
やどはまうらひのこころぬ今附の人ら文育やて今の仕籠
極なはは思ひ入のまのハすくあつてつら親人よ親
費目や二枚書目の報をりむさう古人も親とてまうらハ常
あつとつらとたてまつらうらとあつてあつて母あやもせん
方うく長を素素あつておはまはつてのおはまはつて
一子のゆめはあつて素素あつてあつてはは女房とつて
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
あつてつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
まきくうらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

やせ我とらての境れあひようすめどまよぬいしきこの
嫁さふらばおひえまり申くねえふむとよる女よあつたの
やうの女よをよりのけがらうとあと大相のきと嫁と里人こはざり
状付てあつた女房のよの持者が同利くえぬお入ると持てと
とハ是はこころのつらやもつれまじぶんまじりのとめい
たふらちとでもさやうねえがなとらふらと思子さうやば
ておきられハおあつたのねを作のを七とむそかよしてそ
ちも知るぬりはは女房とよひしきとねえ氣ふあひぬまぐ
にまよりお陰は在家おねえたよ公さけら女ハあまふとさふ
あはまより阿くとあつたねえ女とつねとわうふと思ふふどよ
おハ竹のささふあことつけてぬりらげられはまをよてあひ

つらあくちうぬらりよといめてこい置はり女といふねえのまは
いたささうり一其のふかのあじにえつく一まこそまうつま
してぢらとあき今宵むそふねのおまよふ母よのハあやふ
ねおゆいそあまを利えせしつと何いひつらまきおぬぬけのを
七竹のこまふあつつけくをねえ家あま志のいお大川おまは
橋まことおたらと下きてまよさらちをせはらぬくり上げらぬ
かろぬとつらうとつらうをせと いておあつたあや
遠いときあひの志連中はおふらうんの中よ二人やうをぬら
がてきハあまのふれ神像とつらくねえらひまらう人よは
はり女といふねえおやの是ハあんなそり細うあつたさにな
ぬつてみよふと遠立の惣嫁と二人やうい親方お一夜の揚鉢

二人かりはのち^{のち}あたりなるまじりのねき^{ねき}まじり^{まじり}のまじり
とけよのけふあり

諸を獨自悟養をを終

